

2010年3月

奈良県高取町は古い町屋スタイルの家が並ぶ静かな町である。そこに通る土佐道を歩くと、その昔最盛期だったころはさぞにぎやかだっただろうなと思いを馳せずにはいられなかった。飛鳥京を建設するために四国土佐から多くの人々が助けに来たことから土佐道と名前がついたそうだ。3月になるとこの道は2007年に始まった雛人形祭りで活気を取り戻す。古い町屋スタイルの家やお店に雛人形が飾られる。平安時代から雛人形を飾る習慣があったようで、人形は悪霊を封じ込めると信じられていた。この習慣は、わら人形を川から海に流すことでわら人形が悪霊と負のエネルギーを持って行ってくれるという神道の雛流しという伝統に由来するそうだ。高取町の雛人形祭りでは京式(関西)と江戸式(関東)の両方の雛人形が飾られている。京式と江戸式ではお内裏様とお雛様の位置が逆なのだそうだ。道の終点は有名な壺坂寺で、山を見下ろすように建っている。その山をさらに奥に進むと日本三大山上城の1つである高取城跡に続く。石造りの高塀は山上に残っており、そこからは奈良と吉野を見渡すことができる。大学の研究チームが制作したCGイメージで見ると、この城が当時どれだけ巨大だったかが分かる。

この厳肅な地を訪れた時、滝廉太郎作曲の有名な「荒城の月」を思い出した。彼は大分県竹田市にある岡城址をイメージしてこの曲を作曲し、土井晩翠は会津鶴ヶ城跡を訪れたのをきっかけに作詞したそうだ。私は高取城跡をイメージして「荒城の月」をアレンジした「大和の荒城」を作曲した。

伝統は次の世代へと受け継いで守っていかないといけないと信じている。過去から学ぶことは本当に多い。しかし、伝統は創られ進化してきた結果の産物であることを忘れてはいけない。高取町の雛人形祭りも10件程の民家が雛人形を飾り始めたことで始まり、今では街全体が取り組み、全国から観光客を集めるまでになった。芸術でも同じで、伝統を織り交ぜることから現代人を引きつける新しいアートが生まれると信じている。「大和の月」はオリジナルの楽曲に自己の経験から得た表現を加えることで新しい楽曲に変化させた1例である。